特集1

社会参画活動で地域とつながる

地域や環境に配慮した建築物をつくるだけでなく、まちに積極的に関わり、まちづくりや地域のにぎわい創出、文化財の保存活用、建築教育など、多様な面から地域に関わり、社会参画している建築士事務所が多くみられています。本号ではそうした建築士事務所の取り組みを紹介します。

飯坂温泉の交流拠点になった「旧堀切邸」

Interview

建築とサッカーの両輪でまちを元気に

東日本大震災からもうすぐ15年。未曽有の災害に見舞われた東北地方では、建築士事務所が応急危険度判定や被災度区分判定などで地域を駆け回りました。建築士として文化財や歴史的建造物の復興に携わりながら、サッカーJ3の福島ユナイテッドFCの代表も務めてきた(株)ボーダレス総合計画事務所の鈴木勇人氏に話を伺いました。

鈴木勇人
(株)ボーダレス総合計画事務所(福島会)
代表取締役
福島会理事・元日事連理事
(株)AC福島ユナイテッド
代表取締役社長

Hayato Suzuki
千葉工業大学工学部建築学科を卒業後、(有)鈴木設計に入社。2004年に代表取締役に就任。「対話を重ねた建築」を指標に掲げ、歴史的建築物の再生・活用に数多く携わる。「旧堀切邸」では日事連建築賞奨励賞の他、日本建築士会連合会賞優秀賞などを受賞。飯坂温泉「なかむらや旅館」では福島県建築文化賞復興賞を受賞。2019年に(株)ボーダレス総合計画事務所に商号変更。現在J3所属の福島ユナイテッドFCを運営する(株) AC福島ユナイテッドの代表取締役社長も務めている。著書に『地方創生は古い建築物を見直せ』(幻冬舎メディアコンサルティング、2022年)

震災後、文化財の応急危険度判定で県内を駆け回る

――災害時など有事の対応は建築士事務所が地域に関わる活動の一つといえます。東日本大震災のとき、鈴木さんはどのような活動をされていたのでしょうか。

鈴木：3月11日当日は、建築家の故・古市徹雄さん(福島県出身)との打ち合わせのため東京に滞在していました。大きな揺れを感じる中で地震の一報を聞き、さらに津波が襲ってくる映像を見て愕然としたのを覚えています。福島へは電話がつながらず、翌日動き出したJRに乗って宇都宮まで行き、そこからレンタカーを借りて12日深夜に福島に戻りました。

その後、避難者が福島市の飯坂温泉に泊まることになり、受け入れ先となる避難施設の応急危険度判定を行いました。浜通りの北部にある福島県新地町からも応急危険度判定の依頼があり、宇都宮で手配したハイブリッド車を借りたまま、新地町へ向かいました。新地町では、自衛隊と一緒に行動し、河川の瓦礫のなかに車が落ちていたり、電車がぐにゃっと曲がっていたりと、戦争で爆撃を受けたような凄まじい光景を目にしました。

――文化財や歴史的建造物の応急危険度判定を担当されたのは、それまでこうした建物の改修設計を数多く行われていたからでしょうか。

鈴木：そうだったかもしれません。前身の(有)鈴木設計の創業者である父は、飯坂温泉のシンボル的存在であった共同浴場の**鯖湖湯**(さばこゆ)を市から依頼され再建しました。同じく飯坂温泉にあり、歴史的な価値がありながらも長らく空き家が続いていた**旧堀切邸**の再生プロジェクトでもプロポーザルを経て当社が設計者として携わりました。公共施設は応急危険度判定が比較的早く行われますが、民間所有の建物はどうしても後回しになる傾向があります。こうした民間所有の歴史的建造物や文化財の応急危険度判定は事務所協会から特命で依頼されて行っていました。

福島市には文化財が多くありましたが、残念ながら震災で失われてしまったものが多くあります。その一つが国登録有形文化財の**日本基督教団福島教会の教会堂**です。明治期にヴォーリズが手がけた建築で、保存できるように何度も話し合いを重ねてきましたが、震災で煙突が倒壊し、内部の亀裂が余震で大きくなったことから最終的に解体されてしまいました。公費で解体ができるため、震災直後における所有者の心理状態では仕方ないと思いながらも「修復できるのに」と無念でなりません。

応急危険度判定で訪れた福島県新地町の様子

県内の文化財等の応急危険度判定に従事。できるだけ保存できるように奔走した

あらゆる面から耐震補強を検討し文化財の旅館を再生

鈴木：震災後は、自分たちが関わった建築の状態を問い合わせて確認し、依頼があれば調査に行くという日々が続いていました。その中で、特に被害が大きかったのが飯坂温泉にある**なかむらや旅館**です。なかむらや旅館は、江戸時代建築の「江戸館」と明治時代建築の「明治館」の2館があり、いずれも白壁土蔵づくりの木造3階建てで、1998年に国登録有形文化財に登録されました。なかむらや旅館は鯖湖湯のすぐ近くにあり、その実測調査のために、父が旅館に滞在して毎日スケッチしていた縁があり、文化財に登録されてからも定期的な調査や維持管理を当社で担当していました。明治と昭和の二度の大火では被害を受けなかったこの建物も東日本大震災では被災し、旧堀切邸でお世話になった宮大工の三浦藤夫さんと状況調査に向かったところ、江戸館は漆喰壁の亀裂や建物の傾斜があり、念のため天井裏に入ってみると、2階と3階の間にある太い梁に4カ所の破損が見つかりました。このままでは2階が押しつぶされてもおかしくない状態だったのです。当時はどこも家屋の応急処置に追われ、職人がおらず、数週間後にやっと破損した梁に支柱をあてる応急処置ができました。

ただ、本格的な修復には時間も費用もかかります。修復の相談を受けた私は、「3階部分は取り壊したほうがい

左／国登録有形文化財の**なかむらや旅館**。太い梁に破損が見られたが、折れた梁の両側に木材を通して挟み込みボルトでつないで一体化し、支柱をあてて補強。さらに客室の和の雰囲気にあわせて化粧格子の耐震壁を追加した。右上／飯坂温泉のシンボル的存在の**鯖湖湯**。右下／石造りの**福島市写真美術館**
写真提供：(株)ボーダレス総合計画事務所

い」とやむを得ず進言しました。江戸館は瓦屋根や土壁が重く、そのまま補強だけしても心配が消えません。旅館を今後も続けていくために、あえて3階部分を取り去り、1～2階を残す方法を提案したのです。すると、先祖から引き継いだ旅館を何としても守りたい一心の女将さんから「直すのがあなたたちの仕事のはずです。鈴木さんにできないはずがない！」と叱咤激励され、思わず胸を打たれました。そうして文化的な価値を残しながら耐震性を高めてどのように再生するかを本格的に検討することとなりました。

最終的に2階と3階の間の破損した梁は、新たに梁の両側に木材を通して挟み込むことにしました。新たな木材とボルトでつなぐことで一体化し、さらに支柱をあてがって補強しています。客室は、障子や襖があったところに耐震壁として化粧格子を採用。趣のある帳場は雰囲気に調和するようにケヤキの柱と梁を追加しました。さまざまな方法を用いながらなかむらや旅館を再生し、震災から1年後には営業を再開することができました。

震災から10年経って補強工事を完了 福島市写真美術館

鈴木：2002年に市の有形文化財に指定された**福島市写真美術館**は、旧逓信省が電気試験所として開設した建築で、屋根は洋瓦、内部の壁と天井は漆喰塗りの大正ロマンを伝える石造建築です。この建築は応急危険度判定で「危険」の赤紙が貼られ、解体の方向になっていたのですが、日本建築学会の文化財ドクター派遣事業から保存活動へとつながり、私たちも漆喰壁や天井の改修をした関係で関わってきました。さまざまな学識経験者の報告書を読み、最終的には組積造を専門とし、パルテノン神殿の修復にも関わられている三重大学名誉教授の花里利一先生に技術的指導をお願いし、震災から10年を経てやっと補強工事(PC鋼棒によるプレストレス工法)を完了させることができました。

震災後、さまざまな歴史的建造物や文化財の保存再生に関わってきましたが、登録有形文化財における設計や調査の費用は文化庁から補助があるものの、工事費はありません。修復や再生は所有者に相当な費用負担がかかるため、復興に対する資金援助の制度がもっと充実していくことが望まれます。

サッカーと建築の両輪でまちを復興

――鈴木さんはボーダレス総合計画事務所の代表を務めるほか、サッカーのJ3に所属する福島ユナイテッドFCを運営する(株) AC福島ユナイテッドの社長も務められています。建築とサッカーの二足のわらじを履くのは大